神奈川大学21世紀COEプログラム
「人類文化研究のための非文字資料の体系化」研究成果報告書
Report on the Results of "Systematization of Nonwritten Cultural Materials for the Study of Human Societies" Kanagawa University 21st Century COE Program

東アジア生活絵引

中国江南編

Pictopedia of Everyday Life in East Asia compiled on South of the Yangzi River, China

神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議
The Kanagawa University 21st Century COE Program Center

まえがき

日本では古くから絵に親しんできました。確かに古くは権力者のみがそれを享受しましたが、近世になると支配者だけでなく、民衆も様々な機会に絵を楽しむようになりました。絵は鑑賞する対象としてだけでなく、知識や情報を理解するためにも利用し、さらに観察結果を記録するためにも用いました。絵は日常生活のなかに存在し、絵には人々の生活が描かれました。そのことが、日本において絵引という新しい情報整理・発信の方法が編み出された理由といえるのです。

絵引という全く新しい情報整理・発信の方法は、財団法人日本常民文化研究所が『絵巻物による日本常民生活絵引』全5巻を刊行することで世に登場しました。過去に制作された図像を資料とし、そこに描かれた事物や人々の行為に名称を与えることで、新たな情報を発信するというもので、発案者である渋沢敬三が字引に対する語として絵引を創出して、その独創性を示しました。それまでは、文字による記録の内容を読み解き、解釈することが研究とされ、図像は挿絵という脇役に過ぎませんでした。絵引が登場することで、図像が人々の生活文化を知るための歴史資料となりました。

神奈川大学日本常民文化研究所となった最初の事業として『日本常民生活絵引』の改訂に取り組み、その新版を刊行いたしました。現在も版を重ねています。21世紀COEプログラムの研究計画にその継承発展の事業を組み込むことは早い段階に決まりました。世界的に見て独創性が強く、世界に対して新しい情報整理と発信の方法を提供できると考えたからです。図像資料の体系化と情報発信を私共のプログラムのなかの第1班とし、そこに三つの課題を設定しました。第一は、先輩たちの達成した『日本常民生活絵引』を英・中・韓・日の各国語で利用できるマルチ言語版の編纂、第二は『日本常民生活絵引』が編纂できずに残した日本近世・近代生活絵引の編纂、そして第三に、絵引という編纂方式が日本以外の文化でも可能かどうかを検討するための東アジア生活絵引の編纂です。

本書は東アジア生活絵引の1巻です。本書は、18世紀後半の中国江南地方の生活文化に関する絵引です。資料は有名な蘇州を描いた「姑蘇繁華図」です。「姑蘇繁華図」は蘇州の近郊の太湖の辺から始まって、蘇州城にいたり、市街の様相から近郊の虎丘までを描く画巻です。詳細に町並みを描き、そこで暮らす人々の姿も細かく描いています。写実的な描写です。私たちはこの「姑蘇繁華図」を取り上げて絵引編纂を行いました。ここにお届けするのはその第一歩を示す試案本です。中国の特定の時代の社会と文化を日本語で表記することが如何に困難な作業であるかを編纂過程で痛感しました。多くの問題点を抱えたままの試案本としてお届けします。忌憚ないご批判をいただきたいと思います。

「姑蘇繁華図」は現在中国遼寧省博物館の所蔵です。私たちは博物館において「姑蘇繁華図」を長時間熟覧する機会を得ました。また遼寧省博物館関係者の皆さんからは種々ご教示を賜りました。そのご理解とご教示があって、この絵引も完成させることができました。ここに深く感謝申し上げます。

2007年12月

神奈川大学21世紀COEプログラム第1班代表
福田 アジオ

東アジア生活絵引

中国江南編

目　次

まえがき …… i
凡例 …… iv

Ⅰ　水のある風景 …… 1
1　船 …… 2
2　船着場 …… 4
3　船着場と驢馬 …… 6
4　水辺の庭 …… 8
5　水上生活 …… 10
6　筏 …… 12
7　太鼓橋を渡る …… 14
8　船で働く女性 …… 16

Ⅱ　村の風景 …… 19
9　運河に囲まれた農村風景 …… 20
10　村の広場 …… 22
11　普請の現場と塾 …… 24
12　橋のたもとの牌楼と物見櫓 …… 26
13　春の野良仕事 …… 28
14　家庭内の生糸作りと織物生産 …… 30
15　焼物問屋 …… 32
16　煉瓦造り …… 34
17　槌音響く村の鍛冶屋 …… 36
18　村はずれの寺院 …… 38

Ⅲ　賑わう街並み …… 41
19　橋上の露店 …… 42
20　万年橋のたもと …… 44
21　質屋と米問屋 …… 46
22　官僚の外出 …… 48
23　城内の街並み …… 50
24　川端の問屋街 …… 52
25　物資行き交う川辺の商店街 …… 54
26　老舗が並ぶ商店街 …… 56
27　買物客で混雑する橋の上 …… 58
28　托鉢に向かう僧侶の行列 …… 60
29　人相見に聞き入る …… 62

30 道観と文字占い …… 64
31 山塘橋を渡れば繁華街 …… 66
32 高級店の並ぶ半塘橋 …… 68

Ⅳ 喜びと楽しみ …… 71
33 屋敷での観劇 …… 72
34 村芝居に集まる観客 …… 74
35 露台の踊り子 …… 76
36 河岸の賑わい …… 78
37 料理屋と屋形船 …… 80
38 絵と音楽のある楼台 …… 82
39 船着き場の書画売り …… 84
40 庭園と「名人字画」…… 86
41 水路を進む嫁迎え …… 88
42 婚礼 …… 90
43 山上の宴会 …… 92
44 虎丘とその門前 …… 94

Ⅴ 権力の表象 …… 97
45 城門 …… 98
46 練兵場 …… 100
47 役所の門前 …… 102
48 税銀の入庫 …… 104
49 試験官と受験生 …… 106
50 試験場の門前 …… 108
51 義学 …… 110

解題と考察 …… 113
「姑蘇繁華図」と絵引編纂…… 福田アジオ 115
「姑蘇繁華図」と18世紀蘇州 ……鈴木 陽一 121
明清小説と「姑蘇繁華図」……佐々木 睦 127
「姑蘇繁華図」と蘇州の都市空間構造 ……厳 明 133

参考文献目録…… 137
索引 …… 141

1　本書は『東アジア生活絵引』の1巻である。

2　本書は徐揚「姑蘇繁華図」の図幅から51の場面を切り取り、主題を示すタイトルを与え、それらに描かれた事物・行為に番号を付け、それらを表現する語をキャプションとして与え、また図全体を読み取り解読した。

3　底本としたのは清宮散佚国宝特集編輯委員会編『清宮散佚国宝特集』絵画巻（中華書局出版、2004年）に収録された「姑蘇繁華図」である。必要に応じて、遼寧省博物館・中国歴史博物館・蘇州市地方志編纂委員会編『盛世滋生図』（文物出版社、1986年）、厳麗娟編『清・徐揚《姑蘇繁華図》』（商務印書館〔香港〕、1988年）、蘇州市城建館・遼寧省博物館編『姑蘇繁華図』（文物出版社、1999年）の画像を参照した。

4　図の主題に基づいて以下の5章に編成した。各章の中は、①章の主題との関連性の大きさ、②「姑蘇繁華図」の描写の順序（蘇州西南の郊外から蘇州城へ、蘇州城の城壁に沿って南から北へ、さらに蘇州城西北部の閶門から郊外の虎丘へという順序）を総合的に勘案し、配列し、通し番号を付けた。

Ⅰ　水のある風景
Ⅱ　村の風景
Ⅲ　賑わう街並み
Ⅳ　喜びと楽しみ
Ⅴ　権力の表象

5　本書において使用した図は、原図から必要に応じて切り取ったものであり、1つの図とそれに対するキャプション・読み取り解説を見開き2頁に収録した。各図は拡大もしくは縮小されており、原図の大きさとは一致しない。

6　各図の中の事物・行為に付した番号は、基本的に左から右へ、上から下へと付けた。図によっては、主題（主題に近い事物から周辺へ）、遠近（画面の近いところから遠方へ）、時間（描かれた図像内容の時間の展開）などの要素を加味した。

7　描かれた事物・行為の総称の番号に○を、また行為を示す語には番号に□をそれぞれ付けた。

8　各事物・行為に付ける語は、以下の基準に従った。

(1)　原則として事物単体および個別行為にキャプションを付ける。
(2)　名称は現代日本語を基本とし、必要に応じて括弧書きで中国語の表現・表記を併載した。中国語は図像が描かれた18世紀江南地方の表現・表記を優先させ、当時の表現が確認できない場合は、現代中国語で付けた。
(3)　所作・行為のキャプションは日本語、中国語ともに現代語で付けた。
(4)　推測・推定・想像によるキャプションはできるだけ避け、そのような内容は読み取り解説で記述した。
(5)　キャプションの施設名、制度名などの固有名詞には、「　」を付けて記した。
(6)　画像の内容としての文字は読み解き、事物の名称の後に「　」を付けて記した。

9　本書の編纂は共同研究の方式で行われ、研究参加者全員で検討し、完成させた。各図の読み取り解説に関しては、原案を執筆した者の個性が残されているので、各文末に括弧書きで執筆担当者の名字を記載した。

10　本書編纂過程で獲得した知見は、各人が解題と考察編として記述した。

11　巻末に、本書の編纂に際して参考とした文献を、参考文献目録として収録した。

12　巻末には、キャプションとして付けた語彙の五十音順索引を付した。